
グリンピース

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンピース

【Nコード】

N6272Y

【作者名】

しゅん

【あらすじ】

純一は夜になって夢をみた。その夢は現実かのようにはつきりして毎日続きを見れている事に怖くなり悩んでいた。そのうちにその夢は息をした生き物のように別の世界に純一はドンドン引きずられていくのであった。

第1章 この夢なんだよ

純一は、ハッとして目が覚めた。何でこんな夢を見たんだろう。夢と思わない現実的なこんな夢を見たのは初めてだ。確かに夢は脳が休まずに動いている作用がきつと、リアルに見えると思うが、あれはどう見ても余りにも夢とは思えない。純一は呆然としていたが、学校に遅刻すると現実の生活にベットから起き、トイレに向かうのであった。

「よ、おはよう」

裕信が純一の肩を叩いた

「あ、おはよう」

「何かうかない顔してんな。どうかした？」

「お前さ。夢ってよく見る」

「まあ、見るけど、そうそう、俺怖い夢見た。それがさ。ガミガミ怪獣が出てきて俺はもうすぐで遣られる所だったよ」

「なんだって、ガミガミ怪獣って」

「俺のお袋。夢の中でも口煩く言ってさ。そのうち火を噴くんじやないかって、おおこえー。お前はどんな夢を見るんだよ」

「俺か、いいやそんなに見ないよ」

純一は今朝見た夢の話をしなかったが、言っても何か解って貰えないような気がしたからであった。純一はその夢が頭から離れないでいた。そう言えば前にも似た夢を見たことを思いだした。だが、今回は強烈であった。夢の世界で感情を持てることが不思議であった。寝ているのに心の作用が働くのは何故だろう。昔から夢に纏わる話はいくらでもあるが、また、テーマにして研究して発表をしているが、まだこれって判明がないような気がする。死と同様色々な言葉が飛び交うがこれって言う確証がないようなような気がする。

純一はごく普通の高校二年生、彼女がいる訳でもなく友達もそこそこいて、家は公務員の父を持ち、二つ下の妹がいる。毎日平凡な高校生活を送っているのであった。寧ろ何もないことが悩みのように思えて、もっと刺激的なことがこないかと思っていた。いや、ドラマのようにある訳がない。これが俺の人生なのかなと、何か夢を持つでもなく、大学へ行つて社会人になって、相手が出きれば結婚もし、子供も出来て淡々とした退屈な道が持っているのかと、自分の先を想像しては、あーとあくびをしたいような毎日だと人生を達観していた。

また晩が来た。今朝夢を見たことをすっかり忘れて純一は深い眠りに着くのであった。夢の中で純一は階段を降りていた。その階段は白い螺旋になっていた。「あれ、これって同じ」と純一は気が付く。その階段を降りた先には、女の子がいた。

「こんにちは、純君」

「えっ、君僕のこと知っているの」

「もう、忘れた。昨日、君が言っていたんだよ。僕の名前は滝野純一ってね」

「そうだった。ってことは君と毎日こうして会っているってこと」

「そうみたい。君が夢を見てくれたらね」

「ちよっと、待ってよ。夢って同じ夢も見れないし、まして昨日の続きなんてよけいじゃないよね」

「まあ、深く考えるはよそよ」

「あっ、君の名前は、これも僕が訊いたかもしれないけど」

「そうね。今度は忘れないでね。美樹」

美樹は小柄で白の टीー シャツ に チェック の ミニ スカートを履いていた。笑うと八重歯が見え純一と同じ年齢の十七歳である。

「ここって何処なの？」純一が訊いた。

野原で他に何も無い。空だけが青く隅渡っていた。春の心地よい

暖かさでこの空間に安堵感を憶えるのであった。

「純君、この世界君が住んでいる所と違うの分かっている」

「えっ、て言う事は現実ではないってことだよな」

「そう。私は君が住んでいる世界にはいけないから、純君が来てくれないと私と会えないってことかな」

「でも、この世界って何」

突然美樹は大きな声を出して笑いだした。

「何が可笑しいの」

純一はムツとした顔になり、こっちが真剣に言っているのに美樹の態度に腹ただしく思えるのであった。

「あっ、ごめんね。だって、この世界って純君の世界みたいなものじゃないの。君が寝ると夢を見る。だから君が描いているのと同じだと思うんだけど」

「でも、僕には分からないよ。だって、夢って毎日同じ場面で見えるだろうか、そして、僕は美樹ちゃんこうして話している。あーわからないよ。現実か夢なのか」

純一は頭を掻き、どうなっているのか訳分からないと言う表情をみせた。

遠くからトンビの声が聞え二人の頭を飛んでいった。飛行機雲が一本斜めに線が引いて飛行機が飛んでいる。まったく現実の世界と変わらないような気がした。

「ここって、夢の世界だよな。だったら僕が行きたい所へでもいけるの」

「そうだよ。そんなこと朝飯前だよ。空だって飛べるし、世界の何処でもいける。時代も過去も未来だって、自由じだだよ」

「そうか。でも、よく分からないよ。僕が不思議なのか。君が不思議なのか」

「くっす」美樹は笑った。

「えっ、何」

「だって、この世界は純君の世界なんだよ。だから純君が自分のしたいことをし放題だよ」

美樹は下向きに顔をして分かってないよなっでも思うような顔した。美樹は背を向け歩き出した。その後純一が美樹を追いかけていくように付いて行った。何処からきたんか真っ白に蝶が飛んできたと思った瞬間一面が名の花畑に変わっていた。美樹はさっさと歩いていくので、菜の花畑の中に紛れてしまい行方を失ってしまった。そのとき純一は目が覚めた。

朝になってカーテンの横から朝にの光が差し純一は寝とぼけた顔をしてボーとしていた。まだ、鮮明に夢が頭の中に残っている。いったい続いて同じ夢を見るんだろう。美樹って誰なんだよ。これって怨念？亡霊、幽霊って言う類。僕は何かに取りつかれているの。

第2章 夢って見るの、叶えるのどっち？

今日は学校の休み土曜日だ。純一はパジャマのままでリビングにいき、テーブルの椅子に座った。父修二がすでに座って新聞を見ていた。

ア と大きな口を開けて純一はあくびをした。

「お前は進学を考えているんだろうな。お父さんお前の口からこの大学へいくのか聞いていないぞ」

「そこそこの所に受験するよ。別にどこへ就職って考えててないから、親父見たいに公務員にでもなるかな」

「簡単にいつてくれるなよ。役所で働こうと思ったら、倍率が高いからなかなか入れないぞ」

「そうよ。あんたのレベルだったら厳しんじゃないの」

母麻美が台所から朝ご飯をテーブルに置いた。麻美は昔からあまり勉強のことは言わない方で、放任主義なのか麻美の性格なのか、その為子供達はどこか余所の子に比べるのんびりしている所があり、家族の中で一番のんびりした者が階段を降りて、リビングに入ってきた。

「おはよう」

妹の美菜が椅子に座った。

「美菜。昨日帰ってくるのを遅かったが、本当にミクちゃん所で勉強しているの。あんたこそ受験はまじかで大丈夫なの」

「ちゃんと勉強しています。でも、私って今の所の成績なら、そこそこいけるでしょう」

「うちはそこそこって言うのが多いわね」

麻美は純一の顔を見た。純一は飲んだ牛乳を吐きだした。

「もう、お兄ちゃん汚いんだから」

「ほんとだ。溢すなよ。うちの子達は吞気だね」

「そう言っている。お父さんも私達に言えないと思うけど」

「それはどう言うことだ」

「だって、お母さんが言ってたもん。大事な書類を忘れて役所に行ったって、お母さんがテーブルに置いてあるのを早く気が付いたから、会議に間に合ったんでしょ」

「親父も僕達とそんなに変わらないよな」

「本当に助かったよ。お母さんには、あれがなかったら会議で困る所だったよ」

修二は失敗を暴露されても怒らず、寧ろ妻に感謝の意を述べる所が純一も美菜も好きだった。何よりそう言う所に惚れているのは妻の麻美だった。純一の家庭はごく普通に穏やかで波風もなく、平凡な生活を送っているのであった。

「えっ、今日は役所休みでしょう。仕事へ行くの」
美菜が言った。

「ああ、役所は休みだが、こっちはしなければいけないことが山程あるんでね。休んでいられないんだよ」

「役所勤めも大変だね。僕公務員やっぱ止めようかな」

純一はトーストのパンをかじりながら言った。

「そんなこと言っていたら、あんたどこも就職出来ないよ」

麻美は言葉ではあまり言わないが、内心では純一のことは気がきではなかった。麻美の母は神経質の人で、その度に今日はどこへいくの。成績がちよつとでも下がったら、なぜこんな成績になつてしまったのかと必こい位に訊いてくることが、思春期だった麻美はかなり辛い思いをしてきたので、子供達は心配だが自分の思いをぶつけるのはよそうと思い、ガ　と言いたいときは一呼吸して話をするように心掛けていた。

「そつだよ。お兄ちゃんもちやつとは勉強しに図書館に行ったら」

「お前から言われたくない」

純一は美菜から言われてムツとした顔した。修二がリビングから出って仕事へ行った。

「な、お前に訊きたいことあるんやけど」

「エッチのこと」

「馬鹿違うよ。お前、夢って見る」

「夢はよく見るよ。それがどうしたの」

「じゃ、同じ夢で毎日続きもの見る」

「何それ、あるわけないじゃん。えっ、お兄ちゃんあるの」

「うん。僕さ。三日前から同じ子が連続で出てくるんだよ」

「うそーそれって夢じゃなくて、呪われているよ。ウワー怖いよ」

「やっぱ、幽霊的なものなのかな」

「その夢覚めたあと金縛り状態になっていない」

「いいや。普通に目は覚めて誰かが乗っているよなことないけど」

「私分かんない。でも、普通ではないよ。あつ、ミクちゃん所へ行かなきゃ」

美菜は朝食を終えて、ダイニングルームを出て二階に上がって行った。純一は右手を頬に当て肘をテーブルに乗せて考えていた。

麻美がダイニングに入ってきて「どうしたの。純一何か深刻な顔して、さっきの話ちよつと言い過ぎたかな。あんたもそれなりに進学のことは考えているわよね。お母さん純一なら、きつと頑張ってくれると思うているし、信じているから余り進学のことは口にしないようにしてるつもりなんだけどね」

麻美は煩い親にならないように、子供達に気を使っているが、当の本人はそのことは何も気にしなく、夢の美樹が気になって仕方なかった。しばらくして純一は「えっ、そんなこと僕は全然気にしていないよ。どこの親でも進路は口煩く言っているだろうし、僕は寧ろお母さんの子で良かったと思っていいよ。僕達の気持ちに任せてくれるから、寧ろ親を裏切ったら申し訳ないと思うよ。ありがとうお母さん」

麻美は微笑んで薄ら涙を見せるのであった。こんなにも優しい言葉を掛けてくれる我が子が嬉しく、自分が育ててきたことは間違えない。譬え、受験を落ちたとしても焦らず子供達を信頼して見守って行こうと思っていた。

だが、純一は要領もよく世渡り上手な所もあった。友達は塾へ行っているし、部活は英会話部に入っている所以で休みに練習があることもなく、勉強をする気分じゃないが暇なので図書館へ行くことにした。

初めは純一は参考書を広げて勉強していたが、一時間もしない内に疲れてきて、自動販売機でコーラを買って休憩場で飲んでいた。ふと純一は夢に関する本はないか調べたくなった。

人はなぜ夢をみるのか、夢は欲求不満の表れ、人間の心には自分で意識出来る顕在意識と、自分でまったく意識出来ない部分潜在意識の二つがある。顕在意識では脳がストップをかけていた行動を、潜在意識の中では思い切って実行していった。普段から恋人がいない場合、普段は意識してなくても、心の奥底では寂しい自分がいてそれが夢に現れる。欲求不満だけではなく、日常生活を送っていく中で、多くの人と言葉をかわたり、新聞、テレビ、雑誌などから膨大な情報のうちの一部が何かのきっかけで夢に登場していると考えられます。

なるほど、では僕は欲求不満。彼女がいらないことを寂しく思っている。それで、美樹が夢の中に現れるの？なのかな。でも、僕は今の所彼女が凄く欲しい訳でもないのにな。

あー分かんない頭がおかしくなるよ。これを否定すらなら、やはり心霊、スピリチャー系前世、先祖、考えれば考える程頭が纏まらない。純一は本を見るのを止めて図書館から外にでた。

そして晩になり、たまたまで何も気にすることはないと純一は眠りに付いた。

ここはどこだろう。と純一は夢の中で考えていた。すると大きなボールの上乗りころがしながら向ってくるのはサーカスのピエロがきた瞬間にメリーゴーランドが廻っている。馬の乗り物に美樹が乗っていた。

「純君も乗らない」

「えっ、僕が」

と言っているといつの間にか僕も乗り物に座っていた。

「なぜ、君が僕の前にこうして現れるの。君っていったい誰なんだよ」

「うふ、私の世界じゃないってば、純君の世界よ」

「僕の世界でもないよ。僕は彼女が欲しくて欲求不満でもないし、まして寂しいなんて思ってもいないよ」

「私はあなたの世界には行けないのよ。いや、私はあなたの世界では住めない」

「じゃ、僕が君に会いたい為に君の夢の世界に来てるってこと。また、訳の分からないよ」

「じゃ分かるようにしてあげる」

「どう言うこと」

純一が言うともリーゴーランドの馬が本当の馬に乗って走っていた。その後ろを美樹も馬に乗っていた。馬は草原のような所を駆け出している。

「えっ、何処へいくの」

「大丈夫よ。純君は何も考えずに馬のしっかり掴まっついて」

馬は凄いスピードを上げて駆け出した。野を走り谷を走りときには海の浜辺を走り抜け走っていると言うより、飛んでいるような感じであった。

「ちよっと待ってよ。えらく早いよ。怖いと言う感覚はないが、走

り過ぎじゃないの」

純一は馬にしがみ付いていた。馬はまるで羽根が生えたドラゴンのように森に入っても木を倒して次から次と「これって、ダンプ？」息も付くことなく馬は走っていた。やっと、馬は止まった。

純一は馬にしがみ付いている為、止まっていることも分からなかった。

「純君。着いたよ」

美樹が純一の方に来て声を掛けていた。純一は顔を上げた。そこは高い山と山の谷間にいた。何軒か家が並び立っていた。ここは何処なんだろう。

「ここは私が暮らしている所よ」

「美樹ちゃんの住んでいる所なの。君って田舎に住んでいるんだね。親と一緒になの」

「そうよ。両親に兄弟六人に親戚達は隣り居るわ。さあ、来て」

美樹は純一の手を引っ張るように強い力で連れていくのであった。

「おい、そんなに引っ張らないでよ」

女の子なのに凄い力に驚き、純一は美樹のままに抵抗も出来ずに、美樹が住んでいる村のような所に連れていかれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6272y/>

グリンピース

2011年11月23日19時53分発行